ひとはくトピックス

1 「丹波竜」を新属新種タンバティタニス・アミキティアエとして命名記載

これまで「丹波竜」という愛称で呼ばれてきた丹波市産の恐竜が、動物分類学の専門誌 Zootaxa の第 3848 号（2014 年 8 月 12 日発行）において竜脚類の新属新種として記載され（タンバティタニス・アミキティアエ）と命名されました。この化石は 2006 年に丹波市山南町上滝の篠山川河床に露出する白亜紀前期の地層である篠山層群から地元の地学愛好家村上茂・足立洌両氏により発見されたものです。今回記載論文が出るまでには、発見以来6回にわたって行われた発掘と長年にわたる剖出作業（化石から岩石を除去する室内作業）が必要でした。タンバティタニスの研究は今回の論文で終わりではなく、まだ剖出の終わっていない部分の研究、さらに骨格復元が必要です。また、篠山層群からは原始的な哺乳類ササヤマミロス・カワイイそして下記の新種のトカゲなどのほかにもカエル類、卵の化石、そして小形の恐竜などまだまだ研究すべき化石が残されています。

（自然・環境評価研究部　三枝　春生）

新属新種として記載されたタンバティタニス・アミキティアエの尾椎

2 「小さな学校キャラバン」を実施しました

ひとはくは、2002年から「地域を愛する心を育てる」をモットーにキャラバン事業に取り組んでおり、2012 年には、「ゆめはく(2t トラック)」を導入しています。今年度は、試行的に県内のへき地指定されている学校を対象に公募し、応募のあった7小学校でキャラバンを実施しました。神楽小学校訪問は NHK「とっておき兵庫」にとりあげられています。実施にあたっては、研究員と担当教員で打ち合わせを行い、展示やセミナーの内容について企画・調整を行います。学校からの応募動機には、「昆虫標本や資料が持つ迫力やおもしろさを体験させる機会に」「オープンスクールを利用して保護者や地域の方々にもよびかけたい」といった声があり、終了後には,「少人数対象のキャラバンは、博物館に出向くのとはちがい、興味対象が焦点化され、一つの展示物に対しても友達同士の意見交流などでより深く興味をいだかせることができる」といった評価がありました。これらの声は、来館が困難な地域や小規模な人数を対象としたキャラバンの意義を示しています。今後も積極的に実施したいと考えています。

（生涯学習推進室　副室長　藤本真里）

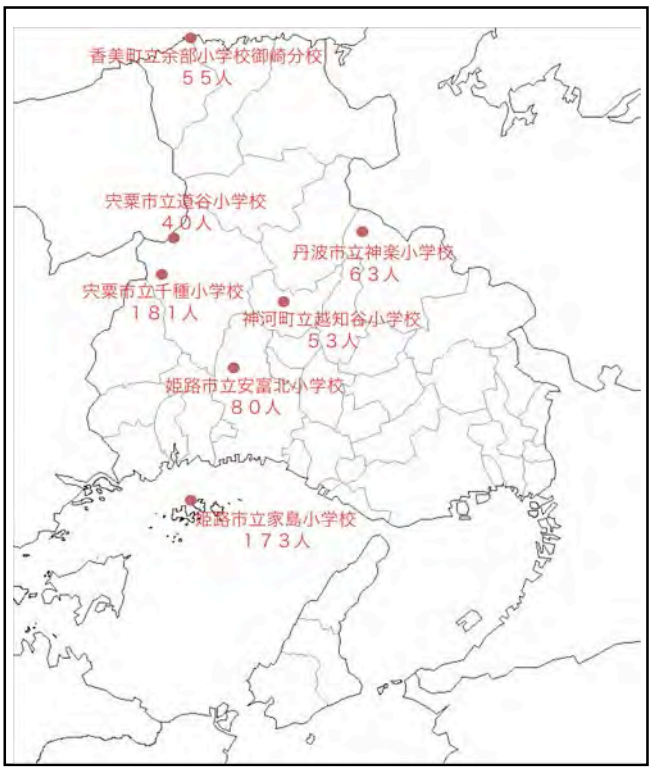


図１ 「小さな学校キャラバン」で訪問した小学校と利用者数

写真１ 家島小学校　貨物船で家島に向かうゆめはく

写真２ 神楽小学校　NHK の取材を受ける中瀬館長

写真３ 千種小学校　近くの幼稚園児もきてくれた

3 コミュニケーション・デザイン研究ユニット始動

現代の人間社会は、さまざまな生き物や環境との関係の上に成立しており、社会全体のなかで自然に対するより深い理解を広げていくことはきわめて重要なことです。多様な価値観やニーズをもった人たちに、自然や環境のことをいかにして伝えていくかを主たる研究テーマとして、新しい研究ユニット「コミュニケーション・デザイン研究ユニット」が発足しました。

メンバーには、動物や植物に関する従来の専門性を保持したまま、ひとはくが行うさまざまな事業を通して科学コミュニケーションのあり方を明確化し、具体化することに興味をもった研究員が集まり、活動を開始しました。

想定される研究テーマ

- 多様な人々に対する自然学習・環境学習のあり方の研究
- 標本を介した新しい科学コミュニケーション
- 市民活動による自然の理解に関する研究
- コミュニケーションの保障を可能にする生涯学習施設のあり方の研究
- 自然科学と芸術の融合手法の開発

博物館は知識を伝えるだけではなく、個人と社会、あるいは世代間をつなぎ、知の交流をはかる社会的装置の役割を果たす、いわば知のプラットフォームとして新しいコミュニケーションを創出することができると思います。このような新しい研究分野の確立をめざしています。

（自然・環境評価研究部　高橋　晃）

左上　学校向け環境学習

中上　植物標本を使った一般向けセミナー

右上　新スタイルのギャラリートーク（美術品の科学的解説）

右下　県民自らが作る展示　設営の様子

4 『ひとはく 20 年のあゆみ』を編纂しました

平成 24 年 10 月に開館 20 周年を迎えた当館の、開館準備期から 20 年目までの出来事をまとめた冊子「ひとはく 20 年のあゆみ」を編纂いたしました。企画立案は平成 24 年 1 月。編集担当者が集まり当館の実施した事業や組織運営について、「研究」「資料」「生涯学習」「シンクタンク」「連携」「マーケティング＆マネジメント」「災害対応」の7章立ての目次案を作成、館員総出で執筆作業に当たりました。

過去の資料がほとんど残っていない項目もあったため、すでに退職・異動している者へのヒアリングを行なったほか、関係した館員同士で当時の様子を振り返るなど、当時の関係者の記憶掘り起こす作業に多くの時間が必要となりました。ふんだんに図表、写真を取り入れたほか、巻末には博物館活動について指標するする様々な数値データを集計して掲載しました。

結果、発行までに約 2 年の歳月を要し、総ページ数は 128 ページに上りました。原稿を読み返すと、十分に記録にとどめられなかった項目も多数ありますが、20 周年の境に定年退職を迎える研究員の数が増えていくなか、開館当時からの取り組みの多くを記録した冊子となったと自負しています。

この冊子が当館の今後の運営だけでなく、県内外の博物館の発展にも幾ばくかの役割を果たすものとなればと願っています。

なお、冊子は下記のサイトからご覧いただけますので是非一度ご笑覧いただければ幸いです。

http://www.hitohaku.jp/publication/book/20th-ayumi.html

（研究・シンクタンク推進室　室長　橋本佳延）

5 ひとはくサロンのリニューアル

博物館の情報システム更新にあたって、4Fひとはくサロンの全面的なリニューアルを行いました。リニューアルのテーマは、様々な立場の方々が多様な学びを体験できる、ゆったりとした空間づくりです。これまではデスクトップPCとモニターが格納された大型什器が設置されていましたが、今回のシステムでは小型のタブレットPCを採用し、モニターアームを用いて色んな角度や高さで閲覧できるようにしたことで、子どもから大人、車椅子の方も閲覧できるうえ、机上に広いスペースを確保することができました。このスペースを使って、可動式の各種資料や標本、図書はもちろん、博物館の各種資料や模型などをパッケージにして1つの箱に詰めた「ミュージアムボックス」を整備しました。例えば、チリメンモンスターの箱ならば、封入標本や図鑑、顕微鏡、解説パネルが一緒に入っています。来館された方は、この箱をテーブルに持ってきて中のアイテムを使って学習することができます。タブレットPCのメニュー画面を選択すると、箱の中身についての解説ビデオなどを見ることもできます。

情報端末が小型化して出来たスペースを活かして、可搬可動式の触れる標本や資料なども配置しています。これまで金属製のロッカーに入っていて分かりにくかったものや台の上に散在していた資料を、関連する図鑑などと一緒にして棚に再配置しています。テーブルも棚も可動式となっているので、イベントや利用形態に合わせて簡単に移動することができるので、空間利用の幅が広がりました。これ以外にも、壁一面のホワイトボードを導入してワークショップ機能を強化したオープンラボ（旧小セミナー室）の改装や館内のWIFI環境の導入、iビーコンと携帯端末（スマホ）による情報発信、研究員の論文紹介コーナー、博物館の刊行物配架コーナーなども設けています。改装前は、親は休憩コーナーで、子どもは情報端末側に分離していたのですが、改装後は、親子でテーブルに座ってゆったりと過ごす方が顕著に増えました。

（自然・環境マネジメント研究部　三橋　弘宗）

写真の説明

左上：フロアスタッフのカウンターと収納棚

中央上：タブレット式の情報端末とテーブルなどを含む全景

右上：可動式の棚と標本展示

左下：ミュージアムボックス

中央下：オープンラボでのワークショップの様子

6 篠山層群のトカゲ類化石

兵庫県丹波市・篠山市に分布する下部白亜系篠山層群（約1億1千万年前）からは、　　などの恐竜類と供に、複数のトカゲ類化石が産出しています。産出している化石の多くは遊離した部分骨ですが個々の保存状態は良好で、比較的多くの形質を呈す歯骨化石を対象に分類学的研究を進めた結果、少なくとも四タイプのトカゲ下目類が確認されています。これらに加え、一つの部分的な右下顎化石（歯骨+板骨）は、9本の歯列を歯骨の前位に呈すことから、中国から一種のみ報告されている　　と同属とされ、歯の形態が異なることから新種　　として記載報告されました。この化石は、白亜紀前期における中国・日本のトカゲ類相の近縁性を初めて明確に示すもので、他の標本も含め篠山層群のトカゲ化石はアジア地域における同分類群の進化の歴史を探る上で重要な資料であり、今後も新たな発見・成果が期待されています。

（自然・環境評価研究部　池田　忠広）

篠山層群のトカゲ類化石新種 *Pachygenys adachii* の標本写真

7 Kids サンデーのスペシャル版を 11 月に開催し、様々な連携活動団体の出展があり、賑わいました

ひとはくでは、Kids サンデー（月の第1日曜日）で、小さな子どもや親子向けのプログラムを実施（年間 9 回）しています。2014 年 11 月には、スペシャル版として「ひとはく Kids サンデー・スペシャル 2014」を実施し、様々な連携活動団体13グループが出展してくださいました。たくさんの小さな子どもたちが色々なプログラムに参加して親子で楽しんでくれました。

（キッズひとはく推進プロジェクト　小舘　誓治）

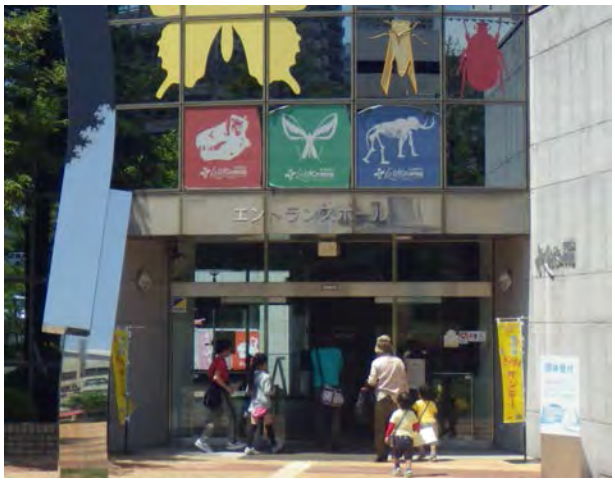


写真1　Kids サンデーの日のエントランスホール前

写真 2　Kids サンデー・スペシャルのポスター

写真 3　小さい子ども向けの「落ち葉のプール」の様子

写真 4　サイエンスショー・スペシャル「みんみんせみづくり」の様子

8 NPO 法人 人と自然の会が設立 20 周年を迎えました

平成 5 年（1993 年）に開始した博物館のボランティア養成講座の修了生が、平成 6 年（1994 年）にグループとして活動を開始しました。平成 26 年（2014 年）は、それから 20 年目となります。

グループは、平成 9 年（1997 年）に名称を「人と自然の会」として規約等を整え、平成 11 年（1999 年）に、県内の団体としてはいち早く、特定非営利活動促進法に基づく法人格を取得しました。当時、博物館でのボランティア活動といえば、館業務の補助的な活動が多かったのですが、人と自然の会は、当初より、自主的で自立した活動を旨とし、博物館のパートナーとして、来館者向けのさまざまなワークショップを企画運営してきました。活動の柱で毎月第 3 日曜日に開催される「ドリームスタジオ」は、平成 27 年 3 月に 208 回を数えます。博物館が平成 12 年度（2000 年度）で養成講座を終了した後も、主体的に会員募集セミナーを開催しており、平成 27 年 3 月現在の会員数は 72 名です。

人と自然の会では、平成 26 年度、20 周年記念事業として、8 月、11 月のドリームスタジオを「スーパードリームスタジオ」として、強化段ボールで大きな恐竜をつくるイベントを目玉に、規模を拡大して開催しました。8 月は、52 名のスタッフが 6 つのプログラムを展開しイベント体験者は 875 名、11 月は 40 名のスタッフが 8 プログラムを展開し 574 名の方が体験しました。また、平成 27 年 3 月には、20 周年記念誌を編集発行し、とくにこの 10 年間の活動を中心に、成果を取りまとめました。

当館では、人と自然の会を含む多くの連携活動グループや地域研究員が、パートナーとして活動くださっています。館の機能を活用し、拡張する、これらの方々の活動が、館の魅力を高めています。今後もよい関係を続け、利用者へのサービスを充実させていきたいと考えています。

（自然・環境評価研究部　八木　剛）

タスクフォース事業

タスクフォース（組織群）について

従来の組織群とは別に、短期の課題を達成するために平成 20 年度からタスクフォース制度を導入ました。各タスクフォースはリーダー・マネージャー・メンバーで構成し、課題の達成状況に応じて年度途中でも人員は変更可能です。また新たなタスクフォースを発足できるようにしています。

■資料タスクフォース

あたらしい自然史資料収蔵システムの構築と収蔵庫将来計画に立案

・既存収蔵庫の満杯率が限界に近づいているため、今後 20 年を視野に入れた生物系資料の収蔵システムの検討をおこないました。

・開館20年を機会として、これまでの資料収集方針の見直し、新しい資料収集方針策定への検討をおこないました。

・ 仮保管されている頌栄短期大学からの寄贈高等植物標本について、適正な管理と運営のあり方を検討しました。

（資料収蔵システムタスクフォース リーダー　秋山弘之）

■大学連携タスクフォース

(1) 大学連携にかかる課題の検討

・当館には兵庫県立大学の自然・環境科学研究所が併設されており、多くの研究員は県立大学の教員を併任しています。開館以来、当館はこの特性を活かした活動を数多く展開してきました。一方、県立大学は公立大学法人へと移行し、当館と県立大学の関係にも様々な変化が認められるようになってきました。このような状況をふまえて当館が今後取り組むべき課題について検討をおこなった結果、人材育成に向けた活動の強化・推進が最も重要な課題の一つであると考えられました。そこで、このような活動の一環として、2015 年度のセミナー体系に「じっくりセミナー」という新たなカテゴリーを設け、人材育成型セミナーの充実を図りました。

(2) 兵庫県立大学創立 10 周年／創基 85 周年記念事業の調整

・標記事業の一環として実施されることになった「兵庫県立大学創基 100 周年ビジョン」の策定と、「創立 10 周年・創基 85 周年記念　県立大学のあゆみ」の作成に貢献しました。

・2 月 11 日開催の「共生のひろば」を標記事業のひとつに位置づけ、地域連携や生涯学習の特色を PR しました。当日は濱田副学長に研究発表の審査および講評をしていただきました。

(3) 文部科学省「地（知）の拠点整備事業（大学 COC 事業）」への参画

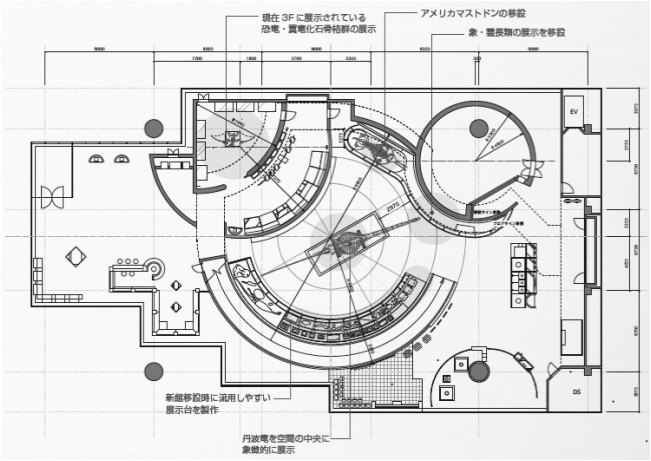
・標記事業は兵庫県立大学が申請し採択されたものですが、当館もこの事業の推進に尽力しています。具体的には、丹波・但馬の地域資源を活かした地域づくりに取り組む「地域資源マネジメント系プロジェクト」と、南但馬・西播磨のむら・まちの再生に取り組む「多自然地域再生系プロジェクト」に参画しています。前者は丹波市・篠山市での恐竜を活かしたまちづくりを中心に、後者は養父市の明延鉱山跡の活用や佐用町の薬草栽培振興を中心に、地域再生エンジンとしての役割を果たすための活動を進めています。

（大学連携タスクフォース リーダー　石田弘明）

■改修・新館検討タスクフォース

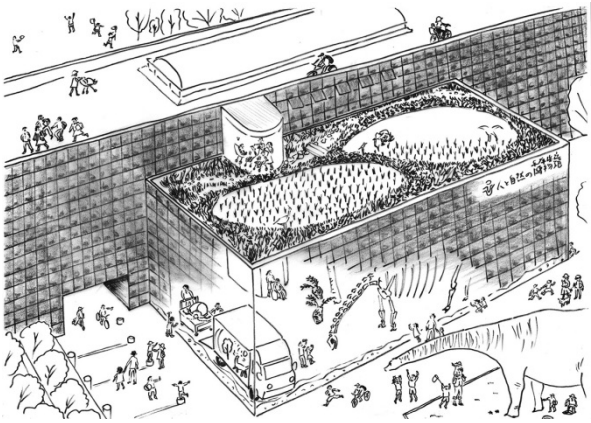
(1)丹波の恐竜化石の全身骨格展示プランを作成

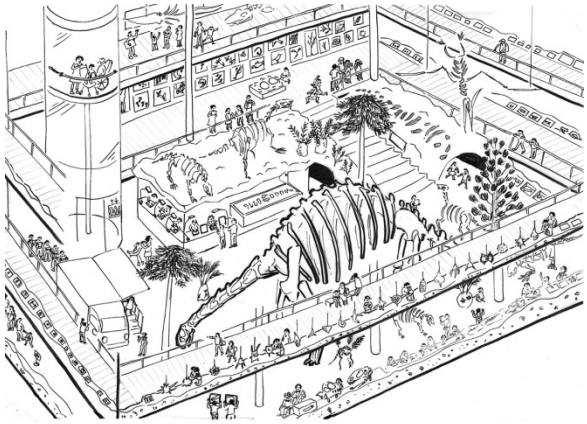
当館の中期ビジョンに基づいて、「丹波の恐竜化石の全身骨格レプリカ」の作成と展示を中心テーマとした展示更新案を検討しました。①新たに新館を設置する場合、②現状の展示スペースのリニューアル、とする２つのケースを想定しました。この結果、②案が予算面と実現可能性の面において妥当と判断し、設計プランと必要経費の詳細案を作成し、重要施策案として提出し、引き続き検討を行っています。



(2)新館設置のプランと課題整理

将来的な新館設置に関する課題整理を行いました。最重要課題として収蔵庫スペースの拡充について、収蔵資料TFと共同で検討した結果、1)ホロンピアホールの改修と用途変更、2)恐竜ラボ周辺用地への新設案を検討しました。また、新館による展示スペースの拡充案では、館の北側に増設することが維持管理面と導線管理の面でも効率的であると考え、概況図を作成しました。





(3)館内展示の修理と改修

館内破損個所等に関する一斉点検を実施し、放置されていた部分についての修理やリフォーム、サイン設置等の整備を行いました。主には、丹波の恐竜化石展示の導入部分、1F動く大地の展示改修、化石工房への陳列棚導入(無人化対策)、1F共生の森関連の設備修復、3F入口・風除室およびエントランスのサイン整備、ビデオ映像展示の機器修復および動画の再コーディング作業、各種サインの再設置などを行いました。現状では、常設展示に関しての故障個所はゼロとなりました。

(4)情報システム更新にともなく4Fひとはくサロンの空間整備

4Fひとはくサロンの全面改修およびタブレットPCの導入、ミュージアムボックスの導入を行いました。同時に、研究員の論文紹介コーナーの設置や図書コーナーの再構成、オープンラボ(旧小セミナー室)の再編成と大型ホワイトボードの設置にともなう演示機能の拡充を行いました。可変可搬展示ユニット化の導入(本年度の重要施策)、携帯端末を用いた館内ナビゲーションシステムの設置試験(県・研究機関特別予算)等を行いました。

(改修・新館検討タスクフォース　三橋弘宗)

プロジェクト

当館では、「新展開」以後、館長辞令による館独自の職制を導入し、研究員が事業部やタスクフォースを兼務する体制としてきたが、「ひとはく将来ビジョン」では、組織体制・マネジメントのあり方の一つとして、「適時チームビルディングを行う柔軟な組織体制」を掲げた。変化の激しい社会情勢に柔軟に対応するため、課題やミッションに合わせ、チームづくりや事業等のリストラクチャリングをフレキシブルに行うことができるしくみが必要であり、平成 26 年度より、「プロジェクト制」の導入を開始した。

これは、研究員になじみのある研究プロジェクトの方法を、事業等にも適用するもので、各研究員が自由に発意し、代表者、分担者、協力者で構成する。構成員は館内部の職員に限らず、外部資金の導入も積極的に進めていく。

平成 26 年度は、多岐にわたる 112 件のプロジェクトが示された。今後、ホームページなども活用し、当館のアクティビティを広く周知していきたい。

平成26年度のプロジェクト

経営 Management
変化する社会状況をリードする

生物多様性戦略の先導
関西広域連合広域環境保全計画実践への支援
生物多様性協働フォーラムの枠組みを活用した生物多様性の普及・啓発、研究開発
兵庫県下市町の生物多様性地域戦略の策定・推進を目的とした行政支援

情報システム更新による館内事業の推進
ゆめはくネットワークの発進（コラボ組織の設立）
セミラチス型マネジメントシステム

ひとはく新館プロジェクト

知的基盤 Basic
研究・資料・シンクタンク機能を強化する

国際的な調査研究
長鼻類体骨格の研究
モンゴル産竜脚類の研究
東南アジア林冠部植物多様性と地理的生態的な群集分化解明のための広域インベントリー
ブータンの爬虫・両生類相の解明と自然史博物館の構築
生物多様性創出機構の解明
世界の都市公園リサーチ PJ
パークマネジメントに関する国際フォーラムの開催
アフリカ中央部（カメルーン、コンゴ共和国など）の既存収集品の整理
アフリカ東部の人類化石調査
ネパール植物誌への貢献
台湾での震災と防災教育

全国的な調査研究
広域分布する蘚苔類における地域集団間分化の解明
ニホンスッポンの遺伝的多様性と起源
兵庫県産植物を中心とした植物分類学的研究
CT スキャンを活用した昆虫形態研究の開発
クロマツ林に代わる海岸林の形成に関する研究
日本産アキギリ属における性表現の進化を探る
伝統的な祭司空間にみる地域の自然生態的インフラの継承システムに関する研究

篠山層群発掘調査
丹波竜組み立て骨格復元
篠山層群脊椎動物発掘調査事業

兵庫県立大学と連携した教育・地域貢献
大学院環境人間学研究科共生博物部門における実践的教育
恐竜化石等を活かした地（知）の拠点づくり、篠山層群フィールドスタジオ事業【大学 COC 事業】
農地の低管理手法の開発【大学 COC 事業】
兵庫県立大学 10 周年・創基 85 周年事業の調整
兵庫県立大学生涯学習公開講座の企画・運営

ひょうごの生物多様性保全
兵庫県における未確認植物群落の実態把握
たつの市鶏籠山の照葉樹林の保全
三田市皿池湿原の保全
照葉樹林の自然性および種多様性の復元
名勝慶野松原の保全・再生
山陰海岸国立公園における生物多様性保全の推進
三田市南公園　まちなか里山保全プロジェクトの支援
生物多様性保全に資するジーンバンク事業の展開
都市公園と里山林の植物相の保全と活用

資料の収集と未来への継承
地学系収蔵庫の資料整理の推進
ひとはく隠花植物標本資料のデータベース化
生物系収蔵（昆虫）の整備
液浸収蔵庫および生物系収蔵（脊椎動物・昆虫）の整備
環境系資料の再整備
古写真の活用プログラム開発
乾燥種子標本の収集・活用
植生資料データベースの構築・公開
植物・植生映像資料データーベースの充実化と有効活用
博物館におけるコミュニケーションツールとしての植物標本の活用
兵庫県内における県産植物の分布調査
日本産木材標本の収集保管
頌栄短期大学標本の登録・整理
生物標本庫（植物）の資料整理とデータの公開
ひょうごの習俗・行事の記録と活用
ひょうごのランドスケープ遺産インベントリーの作成

生態系研究部（流域生態および動物共生）の部門研究
博物館紀要の編集・発行

学習 Education
好奇心を刺激し学び続ける仕組みを提供する

演示によるソフト展開
館内展示空間のリノベーションと演示プログラムの総合運営
魅せる収蔵庫の再整備と演示スペースの創出
ミュージアムボックスを中心としたひとはくサロンの運用
魅せる収蔵庫の再整備と演示スペースの創出
「深田公園植物情報」展示等による演示プログラムの試行

ユニバーサルデザイン
DAISY を応用したコミュニケーション障がい者にもわかりやすい展示解説技術の開発
コミュニケーション障がい者にもわかりやすい展示解説技術の視聴実験

ライフステージに応じた段階的なプログラム
「Kids サンデー」の実施（キッズ活動支援事業）
多種多彩なセミナー
ボルネオジャングル体験スクール最終回
２０１４年度収蔵コレクション展示：ゾルンフォーヘンの化石
２０１５年度収蔵コレクション展示：標本の作り方
２０１４年～２０１６年までの展示計画１　トピックス展示
２０１４年～２０１６年までの展示計画２　コレクション展示
兵庫の植生ガイドの作成
ひとはく生物多様性の森を活用した市民活動・環境学習支援
固有種万歳！プロジェクト

スクールパートナー
夏季教職員セミナー
伊丹市教育委員会との連携
兵庫県立大学附属中学校との連携
兵庫県立祥雲館高校・有馬高校との連携

熟達 Learning & Mastery
担い手の成長を支援し活躍の場を創造する

ひとはく連携活動グループ・地域研究員の支援と連携
共生のひろば推進プロジェクト
はくぶつかんの日の実施
博物館とボランティアのステキな関係～人と自然の会設立 20 周年記念事業

山陰海岸ジオパークにおける学習プログラム開発の研究
深田公園魅力アップ
有馬富士公園　人材育成
丹波市前山（さきやま）地区支援
都市公園活用 PJ
ゆめはくを活用した地域支援アウトリーチ
大型老人福祉センターや児童館、幼稚園等との連携による人材育成とキッズプログラム開発（キッズ活動支援事業）
昆虫を介在したコミュニケーションの創出

地域貢献 Network
多様な主体と連携し地域づくりに貢献する

自治体・ミュージアム・市民・企業との連携
都市公園における文化の継承と創造
加東市連携推進会議
国営明石海峡公園神戸地区管理運営準備支援
尼崎 21 世紀の森構想の推進支援
尼崎の森中央緑地パークセンター運営支援
西武庫公園再生支援
長居公園・長居植物園運営支援
三田市景観計画策定支援
北摂里山博物館構想の支援
野生動物育成林整備事業の支援
川西市生涯学習短期大学事業の支援
東お多福山草原保全・再生プロジェクトの推進

丹波地域の貴重植物の探索と保全活動
神戸市北区道場町における貴重種保全をきっかけとした地域づくり・人づくり
ミツカンよかわビオトープ倶楽部支援
被災した子ども達が大人になるまで
―博物館こそができる長期継続型支援システムの構築
全国科学館連携協議会 近畿ブロック会議の運営
RCE 兵庫 - 神戸～地域拠点とのネットワーク
六甲山大学～地域拠点とのネットワーク
宝塚すみれプロジェクト～地域拠点とのネットワーク
タンポポ調査・西日本 2015～コミュニケーションツールとしての市民調査
兵庫県内のシダ植物分布～コミュニケーションツールとしての市民調査

平成 26 年度事業報告

人と自然の博物館では，その活動内容をよりわかりやすくかつ明確にするために、平成 14 年度から「中期目標」と「措置」を設けています。中期目標はいわば博物館の行動の指針となる大項目であり、それぞれに達成を目指すべき目標値（指標）が設定されています。さらに中期目標各項目の下位項目として「措置」を設定し、博物館活動の活性化に資する取り組みを数値で把握するようつとめています。

- 第1期中期目標　平成 14 年度（2002 年度）～18 年度（2006 年度）
- 第2期中期目標　平成 19 年度（2007 年度）～24 年度（2012 年度）
  ＊開館 20 周年にあたって策定した「ひとはく将来ビジョン」を反映させるため期間を 1 年延長
- 第3期中期目標　平成 25 年度（2013 年度）～29 年度（2017 年度）

1 -1 研究活動

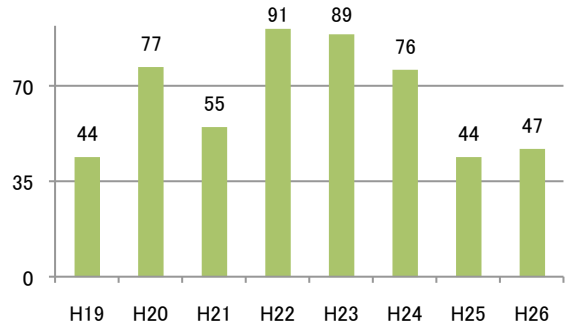
研究
シンクタンク
推進室

すべての活動の基礎となる研究を引き続き精力的に遂行し、成果を還元します。

1　学術論文・図書数

学会等の査読を経て掲載された学術論文と専門図書数

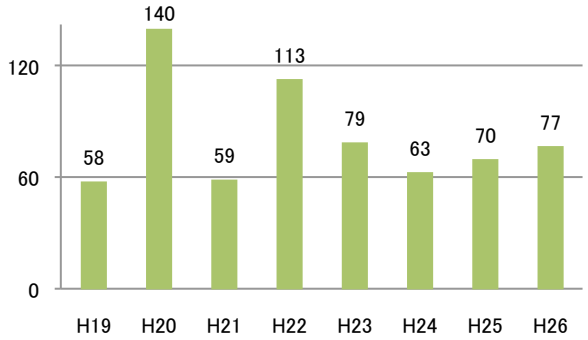
中 期 目 標　：　35 本/年
平成 26 年度　：　47 本（134%）



2　一般向け著書・その他著作数

論文（総説・その他）、一般向け著書，雑誌・新聞等の著作数

中 期 目 標　：　60 本/年
平成 26 年度　：　77 本（128%）



平成 26 年度の達成状況と自己評価

学術論文･専門図書の公表数は合計 47 本、一般向け著書･そのほか著作数は合計77本と、ともに中期目標を達成しています。学術論文は各研究員（30名）が1年間に1本の公表を目標に研究活動を行っており、安定した学術成果を発信できていると評価します。また学術的成果を一般向け著書という形で普及啓発に還元する活動も安定して実施できていると評価しています。

平成 27 年度の取り組みに向けて

安定的に中期目標を達成しているものの、過去には目標を大きく上回る成果を発揮している年もみられることから、中期目標を少しでも大きく上回る成果が発信できるよう、研究活動を活性化につながる取り組みを進めます。個々の研究員の研究成果の発信への意欲を高める館内での取り組みを強化します。

1-2　資　料

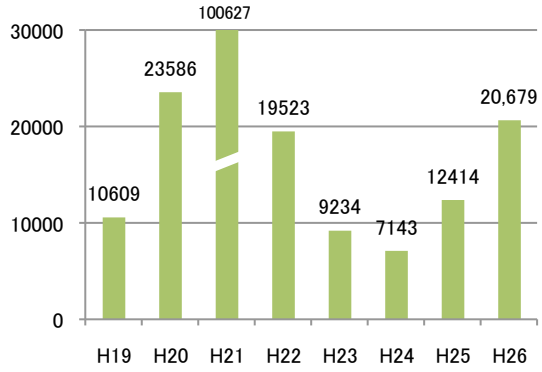
資料収蔵システムタスクフォース

特色ある質の高い資料を収集・整理し、利活用を推進します。

1　資料の登録点数

「ひとはく資料データベース」への年間登録件数

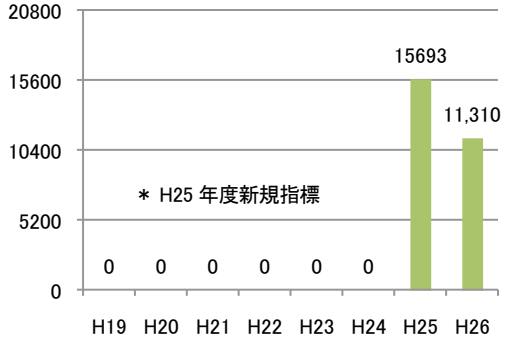
中 期 目 標　：　10,000 点/年
平成 26 年度　：20,679 点（207%）



2　資料の利活用点数

館内展示・館外展示・貸出点数・マルチメディア等データ提供点数の合計

中 期 目 標　：　5200 点/年
平成 26 年度　：11,310 点（218%）



平成 26 年度の達成状況と自己評価

データベース化は順調に進んでおり、博物館の資料収集・活用を広く公開することができました。

平成 27 年度の取組に向けて

テータベース化についてはよりいっそう強く進めます。やや手薄になっている既存資料の研究活動へ生かす点については、資料を使った論文の出版等を推進します。

1-3 シンクタンク活動

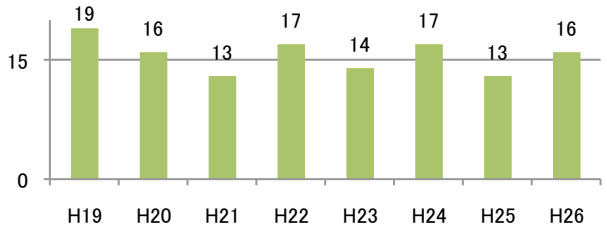
研究
シンクタンク
推進室

「地域資源の保全・利活用の最適化をはかる」ことを目的としたコミュニティシンクタンク活動を展開します。

1　受託件数

調査研究受託契約件数

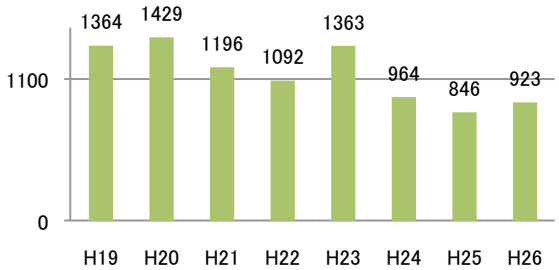
中 期 目 標	： 15 件/年
平成 26 年度	： 16 件（107%）



2　県政・市町行政に対する貢献度

国・県・市町関連の委員会参画数および相談件数

中 期 目 標	： 1100 件/年
平成 26 年度	： 923 件（84%）



平成 26 年度の達成状況と自己評価

調査研究受託契約件数については16件と中期目標の15件を上回る成果を上げることができました。この件数は毎年変動があるものの変動幅は小さく安定した数値が得られていることから、人と自然の博物館の問題解決能力に対する一定の評価が得られていると考えます。

一方、国・県・市町関連の委員会参画数および相談件数は923件と中間目標の1100件を下回りました。このように数値が下回ったのは、平成24年度末にシンクタンク活動の貢献度の高い研究員が退職した影響によるものですが、平成25年度に比べ数値が若干改善しています。これは、個々の研究員が行政や企業等との関わりを増やし、相談を受ける機会が増えてきたことの現れと考えられます。地域資源としての生物多様性の保全・利活用の最適化をはかる上で人と自然の博物館の知見・知恵に頼りたい多くの行政、企業、市民団体から相談を受けるよう、個々の研究員が情報発信するとともに、館としての情報発信も積極的に情報発信をすすめる必要があります。

平成 27 年度の取り組みに向けて

受託件数の安定的獲得のために、継続プロジェクトに対して引き続き貢献するとともに、行政・企業との情報交流する機会を積極的に増やし、受託につながるプロジェクトの提案を行っていきます。

また相談件数や委員会参画数については、単年度で飛躍的な増加をはかるのは困難ですが、中期的な変化を見据えて、当館の調査・研究成果、収蔵資料を積極的に公開し、これらが社会課題に寄与することを行政や企業に対して積極的に PR し、兵庫県内、関西圏で人と自然に関わる課題についてはまずはひとはくに相談しようという社会的機運を高めていきます。

2 生涯学習支援

生涯学習課

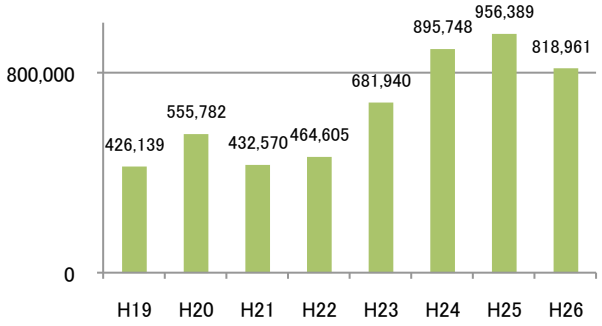
好奇心を刺激する「演示」手法により、あらゆる世代に学び続ける場を提供します。

1 利用者数

総ビジター数

中 期 目 標： 800 千人/年

平成 26 年度：819 千人（102%）

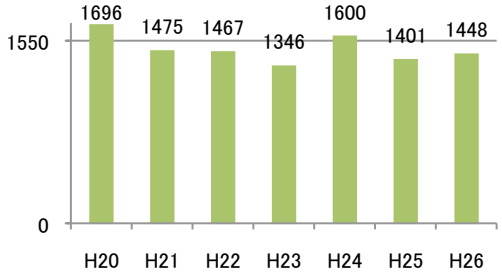


2 生涯学習プログラム

2-1. 主催プログラム実施件数

中 期 目 標： 1550 件/年

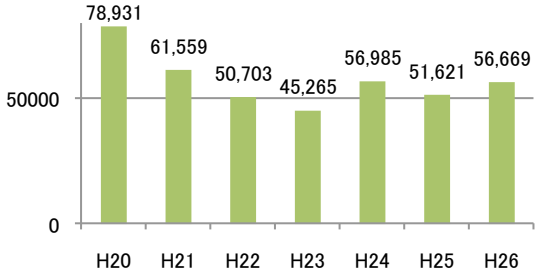
平成 26 年度：1448 件（93%）



2-2. 主催プログラム参加者数

中 期 目 標：50,000 人/年

平成 26 年度：56,669 人（113%）



平成 26 年度の達成状況と自己評価

利用者数のうち総ビジター数については目標を上回る(102%)結果となりました。この数値には本館入館者に「主催アウトリーチ事業」および「共催事業」などへの参加者も含まれます。館内における主催プログラム実施件数は「一般セミナー」＋「特注セミナー」＋「オープンセミナー」を計上し、概ね目標を達成(93%)できており、年間 50,000 人以上の方に主催プログラムを提供できています(達成率 113%)。

平成 27 年度の取組に向けて

システム更新により達成できた魅力ある展示内容あるいは展示情報端末などのコンテンツを積極的に活用し、来館者サービスの質の向上をめざします。また来館を促すための効果的な広報活動の展開や、リピータを獲得するための新しいプログラムやコンテンツなどのサービスの開発に努めます。

3 人材育成と活躍の場の整備

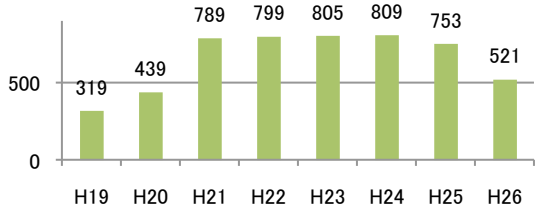
生涯学習推進室

地域研究員・連携活動グループ等の担い手の成長を支援し、活躍の場をつくります。

1 地域研究員・連携活動グループ登録者数

中期目標 ： 500人（H29時点）

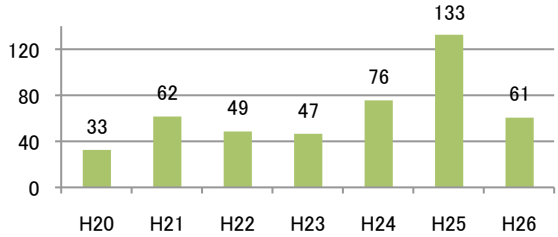
平成26年度 ： 521人（104%）



2 地域研究員・連携活動グループ主催事業実施件数

中期目標 ： 40件/年

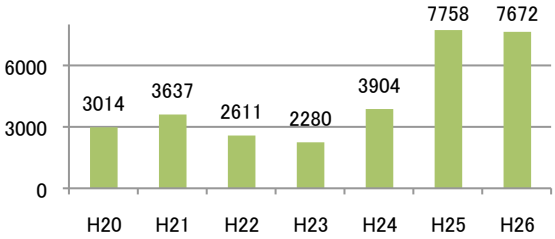
平成26年度 ：61件（153%）



3 地域研究員・連携活動グループ主催事業参加者数

中期目標： 3,000人/年

平成26年度:7,672人（256%）



平成26年度の達成状況と自己評価

本館において、展示や演示が可能なスペースの整備を前年度に引き続き行いました。地域研究員や連携活動グループの方々には、年間を通じてセミナーや様々なプログラムを実施いただきました。共生のひろばと同時開催する「共生のひろば展」をより充実した展示として実施しました。具体的には、共生のひろばのポスター展示の場所と共生のひろば展の場所を分けて行いました。また出展者（地域研究員や連携活動グループ）の紹介を兼ねたタイトルパネルを用意しました。観覧者に展示作品に投票とコメントをいただくことを行いました。

平成27年度の取組に向けて

新しい地域研究員、連携活動グループとして登録いただけるように日常的な博物館活動を通じて該当する方々に呼び掛けて行きます。ひろばについては、今年度「共生のひろば展」の形態を変えて実行しました。今後さらに新しい形で発展するように「共生ひろば」自体の開催形態等も再考して行きたいと考えています。

4 連携・アウトリーチ活動

生涯学習推進室

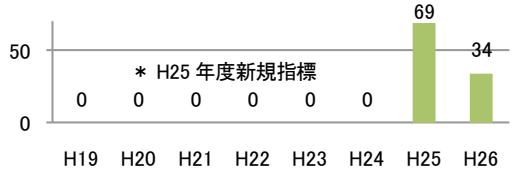
多様な主体と連携し、全県的に事業を展開します。

1 アウトリーチ事業

1-1. ゆめはく稼働日数

中 期 目 標 ： 50 日/年

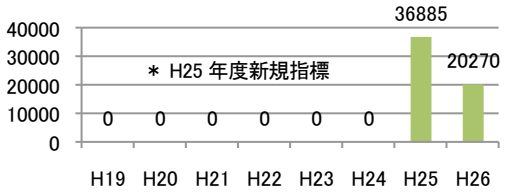
平成 26 年度 ： 34 日（68%）



1-2. ゆめはく参加者数

中 期 目 標 ： 10,000 人/年

平成 26 年度：20,270 人（203%）

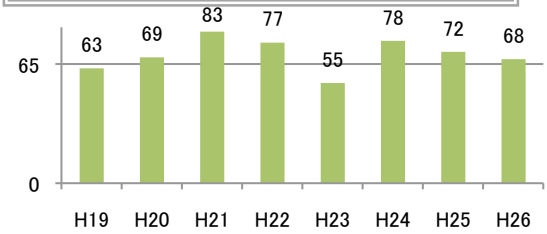


2 連携（協力・共催）事業

2-1. 連携事業件数

中 期 目 標 ： 65 件/年

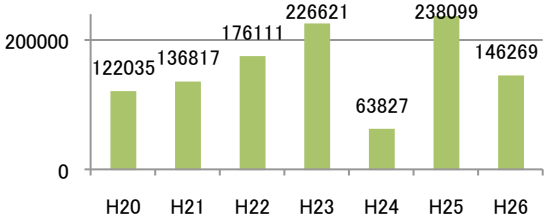
平成 26 年度 ：68 件（105%）



2-2. 連携事業参加者数

中 期 目 標： 200 千人/年

平成 26 年度：146 千人（73%）



平成 26 年度の達成状況と自己評価

移動博物館車「ゆめはく」の稼働日数は、前年度よりも少なくなり目標値に達することはできませんでした。一方「ゆめはく」による展示や関連プログラム等に参加した人数は目標値を超えていますが、前年度よりも下回る数値でした。今年度の新しい試みとして「小さな学校キャラバン」と称して、博物館へ来ていただくことが難しい学校に「ゆめはく」で行かせていただき、地域に即したプログラムを実施し、メディア等にも取り上げられました。連携（共催・協力）事業については、連携事業件数は目標値に達しましたが、連携事業参加者数は目標値に届きませんでした。

平成 27 年度の取組に向けて

連携事業に関しては、現状を維持できるようにしつつ、新しい連携を目指して日常的な博物館活動を行いたいと考えています。アウトリーチ活動は、様々な目的で実施されます。それぞれの目的にあった展示やプログラムを実施するために、今後新しいコンテンツを充実させることが課題です。

5 マーケティング・マネジメント

企画調整室

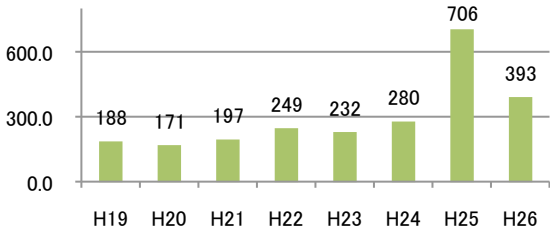
変化する社会に対応した効率的で健全な運営を行い、すべての県民に認知・利用される博物館をめざします。

1 情報発信

1-1. HP アクセス件数

中 期 目 標 ： 300 千件/年

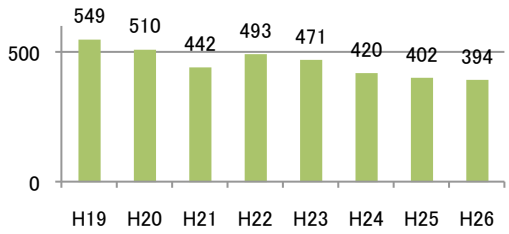
平成 26 年度 ：393 千件（131%）



1-2. メディア等出演・掲載回数

中 期 目 標 ： 500 回/年

平成 26 年度 ：394 人（79%）

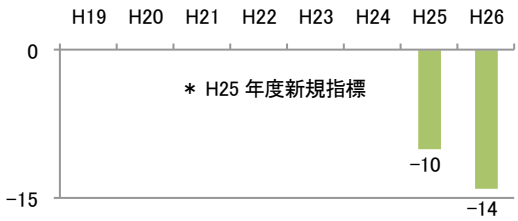


2 エネルギー使用量

電気・ガス・水道使用料の削減率

中 期 目 標 ：-15%（H24 年度比）

平成 26 年度 ：-14%（93%）



平成 26 年度の達成状況と自己評価

ホームページのアクセスは、リニューアルが行われた前年度よりは減りましたが、引き続き高い水準を保っています。検索でヒットしやすい環境が定着していること、親しみやすいブログ記事を頻繁に更新するなどの努力の反映と考えています。メディア等への露出件数は、目標値に届かず、漸減傾向が続きました。研究員の転退職が響いていると思われます。エネルギー使用量は、削減余地が少なくなってきている中、目標値にあと一歩となりました。

平成 27 年度の取組に向けて

ホームページのアクセスやメディア露出に関しては、新たに着任した研究員のパフォーマンスが、少しずつ現れてくるものと思われます。さらに、研究員が内外で関わっている多くのプロジェクトを積極的に紹介し、博物館活動のいっそうの可視化につとめます。エネルギー使用量については、来館者が快適に観覧いただけるよう配慮しながら、引き続き、適正化をはかります。